

上海淪陥期雑誌『萬象』とその読者

池 田 智 恵

“Wanxiang (万象)”, a magazine of the enemy-occupied area in Shanghai and its readers

IKEDA Tomoe

“Wanxiang (万象)” was a magazine published from 1941 to 1945 in the enemy-occupied area in Shanghai. For the first two years it was edited by Chen Dieyi (陈蝶衣), and for the last two years it was edited by Ke Ling (柯灵). At that time this magazine was very famous and had a lot of readers, but in the history of Chinese literature few researches have been made about it because it has been always considered as a magazine belonging to the “mandarin ducks and butterflies” genre (鸳鸯蝴蝶派). Recently, some researchers in Chinese literature have been influenced by “media research” studies, and have begun to research into Wanxiang. But these researches were done almost only from editor perspective, not very often from the readers perspective. This paper aims to study Wanxiang from the perspective of the readers: what kind of people used to read this magazine and why. I chose to focus on the part of magazine which was edited by Chen Dieyi from 1941.7 to 1943.6, because the part which was edited by Ke Ling was totally different, and it would be better to be studied separately. I studied in particular three sections of Wanxiang dedicated to its readers. The numbers of Wanxiang which were published from 1941.7 to 1943.6 had three section for its readers, the “editor’s room” (编辑室) which was the editor’s postscript, the “mail box” of Wanxiang (万象信箱) which was a readers’ contributions column and the “short novels written by students” section (学生文艺选). In the “editor’s room” (编辑室), the editor Chen Dieyi maintained a direct communication with the readers, asking their advice on what to publish or suggesting them new writers works. This shows how important were readers for

Wanxiang. In the “mail box” of Wanxiang (万象信箱), the readers could write their requests and suggestions. Many of them were about what they wanted to read or suggestions on how to better edit the magazine. But there were also readers who would write about their lives, their problem of marriage, work, money, etc… This kind of readers, as we can guess from what they wrote, were very young readers about 20–30 years old and they had another thing in common, they were usually very poor. In the “short novels written by students” section (学生文艺选), we can see a lot of students (high school and university) contributions. Through the study of these three sections we can conclude that for the editors of Wanxiang readers were really important and we can also understand that a consistent part of its readers were very young (including high school and university students) and having tough lives. I would like to continue to study other magazines of the same period for better understanding who were their readers, the way they used to read/enjoy these magazines, why they would read these magazine and the relationship between readers and published novels.

1 『萬象』と先行研究

雑誌『萬象』は、1941年7月に創刊され、1945年6月まで、全4年、全44期が発行された。発行された時期は、太平洋戦争が始まる五か月前、つまり上海がいわゆる「孤島」と呼ばれた末期であった。

申東順によれば、『万象』が出版されたのは、「上海文化が例を見ない不振に陥り、出版界が沈黙した時期」¹⁾である。上海の読者たちに、一つには教育的な意味での、またもう一つには上海市民の抑圧された日常生活を吐露する場としての「精神的な糧（原文：精神食糧）」を提供したと言う²⁾。しかも「当時一般の雑誌が4千冊以上売れることは少なかったが、『万象』は毎号1万冊を越えており、第1年第11期の発行数はすでに2万5千冊に達していた。毎号の発行量は平均して2万冊であり、上海の街角ではいつでも人々が手にして読んでいるのを見ることが出来、当時の雑誌の中では稀に見る現象であった」³⁾と指摘している。上海が日本軍に接収されて

1) 原文：上海文化空前萧条，出版界空前沉寂的时期。『在説与不説之前 上海 淪陷期雑誌「万象」研究』（申東順 中国伝媒大学出版社 2012年）47頁

2) 注1 前掲書 48–49頁

3) 原文：当时一般杂志很少能够销达四千册以上，但它一直超过一万册，第一年第一期发行量已经达到两万五千册。它每期发行量平均达两万册，在上海街头随时能看到人们手上拿着它在看，这在当时杂志发行中是一个罕见的现象。注1 前掲書 61–62頁

以後、文化的困窮に陥った上海において、かなり売れ行きのよい、一定の影響を持った雑誌だったと考えられる。

『萬象』の編集者は、前期と後期で異なっている。1941年7月から1943年6月まで、つまり第2年まで編集を担当したのは陳蝶衣である。陳蝶衣（1909-2007）は、江蘇・常州の人である。14歳の時に上海に移り、父が新聞社『新聞報』で働いていたことから彼も入社した。22歳で編集部に移り、1933年には『明星日報』を創刊した。淪陷期の上海において『萬象』や『春秋』『西点』といった雑誌の編集を手がけた。1945年以降作詞家としての活動も開始し、1952年に香港に移った以後は脚本家や映画の挿入歌の作詞を担当するようになった⁴⁾。つまり、雑誌の編集、作詞家、脚本家として活躍した人物であった。その後、1943年7月から引き継いだのは柯霊（1909-2000）であった。柯霊は、原籍は紹興、生まれたのは広州である。近代中国においては、映画理論家、劇作家、評論家として有名である。

まず、先行研究について整理しておこう。『萬象』はいわゆる「鴛鴦胡蝶派」の雑誌として見られていたこともあり、売れ行きの良い雑誌ではあったが、研究の対象となったのはかなり近年のことである。

『萬象』に関する先行研究として、国内で初めて『萬象』に言及したのは、阪口直樹であろう。阪口直樹は、『中国現代文学の系譜——革命と通俗をめぐる』（東方書店 2004年）で、『萬象』を取り上げ、探偵小説を盛んに掲載したことを指摘し、第2年第4期から第5期（1942年10月から11月）、そこで行われた「通俗文学運動」についてとりあげ、陳蝶衣が新たな通俗小説の姿を目指していたことを指摘している⁵⁾。

他の国内の先行研究としては以下のものがある。

- ・「淪陷期上海における柯霊の演劇活動と前期『万象』について」（鈴木正夫、『横浜市立大学論叢人文科学系列』、Vol.56 No.2、2004年）
- ・「淪陷期上海における柯霊の『万象』の編集について」（鈴木正夫、『関東学院大学文学部紀要』、第115号、2008年）

以上はどちらも陳蝶衣や柯霊に注目して編集方針や何が掲載されたか等について検討している。

国外のものとしては代表的なものとして以下のものがある。

4) 「映画『桃花江』における中国性」（西村 正男、『未名』、第29号、2011年）

5) 探偵小説に関しては『中国現代文学の系譜——革命と通俗をめぐる』（阪口直樹、東方書店 2004年）176-177頁に、通俗文学運動に関しては189-190頁に記述されている。

- 『在説与不説之前 上海 淪陥期雑誌「万象」研究』（申東順、中国伝媒大学出版社、2012年）

これは、『万象』を時代背景等も含めて全面的に討論したものであり、基礎研究と言えるものである。

つまり、このように『万象』が如何なる編集方針で発行されていたかは、先行研究によって明らかになっている。本稿では少し角度を変えて『万象』を見てみたい。

2 読者という視点

先に指摘したが、『万象』は、かなり売れ行きのよい雑誌であった。それでは一体誰が読んでいたのだろうか。近年中国では、『万象』等の研究が行われていることから明らかなように、メディアとしての雑誌研究は行われるようになって来たが、それは編集や掲載された作品を通してのものが圧倒的である。雑誌の受け手であった読者に関してはほとんど言及がない。これは勿論、資料の限界があるために仕方のない状況である。かつて五四新文化運動時に影響力を持った雑誌『新青年』には読者投稿欄が設けられたが、中国近代の雑誌においては、読者投稿欄というのは稀な存在であったと言って良いだろう。1920年代における通俗小説雑誌に、読者投稿欄は基本的に存在しなかった。無論読者からの様々な要望は寄せられていたようだ。それが何故分かるのかというと、頁の埋め合わせのように気まぐれに掲載される記事や、時に編集後記等に読者の要望や意見が引用されているからである。だが、編集者が読者との対話を行うような欄はほぼ存在せず、当時の読者の姿は、引用される読者の意見等から、類推するしか手段はなかった。だが、淪陥期、さらにそれ以降の上海では少し様相が異なってくる。

筆者は、以前に近代中国における探偵小説に関する研究を行っていたが、1945年以後に創刊された探偵小説雑誌である『大偵探』（1946年-1949年）『新偵探』（1946年-1947）『藍皮書』（1946年-1949年）『紅皮書』（1949年）は、読者の目線を意識したものになっている。中に多くの読者に対するの推理クイズ、正解すると商品が当たるものや読者の探偵小説に関する知識を増やすような欄が設けられていた。特に、『紅皮書』は、第4期までしか発行されなかったが、「紅皮書読者倶楽部」という欄が設けられ、読者からの投稿が紹介された。

つまり、1945年以降の雑誌自体が読者という存在をかなり意識させるものになっていったようだ。実はその傾向は、1937年以降に発行された雑誌にも見える。実際、本稿で取り扱う『万象』も読者投稿欄が設けられている。

雑誌の受容者の研究は、中国現代文学研究ではかなり難しいものであった。だが、1937年以

降、おそらく雑誌の中で読者に対しての意識がそれまでと異なったものとなっていった可能性がある。これは勿論推測に過ぎない。雑誌を読めた人数というのは、当時の中国から考えても少数派であったことだろう。だが、中国現代文学の研究の多くは、未だ作家や作品等からの視点のものであることを考えれば、資料的限界や研究の限界があるとしても、受容側に目を向けることは重要ではないだろうか。

そこで、本稿は、1941年に創刊された雑誌『萬象』を用い、そこにどのように読者の姿が見えるのか、資料整理を行いたい。

3 『萬象』における読者の姿

それでは、実際に雑誌『萬象』の中で、読者はどのように姿を現しているのだろうか。基本的には三つに分かれる。ひとつは、編集後記である「編輯室談話」、学生懸賞小説「学生文藝選」、そして読者からの投稿に編集者が答えた「萬象信箱」である。本稿では、この三つの欄について資料を整理したい。なお、本稿の『萬象』の調査範囲は、陳蝶衣が編集した第1年第1期（1941年7月）から第2年第12期（1943年6月）までとする。

3-1 読者ありき：「編輯室談話」

まず、編集後記にあたる「編輯室談話」について見てみよう。

「編輯室談話」は、第1年第1期（1941年7月）から第2年第12期（1943年6月）までの発行期間だと、第1年第1期（1941年7月）、第1年第3期（1941年9月）、をのぞいて掲載された。基本的には、雑誌の奥付の前の頁を一頁割いており（時には半頁の場合もあるが）、その期の雑誌の内容（記事や小説の内容の紹介）、次号の予告等が書かれている。

この欄で興味深いのは、「読者」という言葉が多く使用されていることである。

陳蝶衣は、どのような場合に「読者」という言葉を使っているのだろうか。整理してみると、大体次のようになる。①編集者から雑誌を購読してくれていることへの感謝やその他の呼びかけ、②編集者から読者へ雑誌の読みどころの紹介、③読者からの手紙への応答、もしくは感想の紹介、④雑誌の価格に関しての問題等になる。

例えば、①から考えると、第1年第2期（1941年8月）には「這自然首先應該感謝讀者們的愛護之憂。為了答謝讀者們的熱誠擁戴」とあり、『萬象』が創刊された後、売れ行きが良かったことに関して読者への謝辞を述べている。②としては、第1年第9期（1942年3月）に次号の予告として、王玉蓉という作家の「私底下的話」の内容を紹介した後、「請讀者注意」と読者に呼びかけている。③としては、第1年第9期（1942年3月）に「有幾位讀者來函詢問，電影小

説為什麼突然收消…」とあり、その後何故「電影小説」が掲載されなくなったかの理由を書いている。④としては、第1年第7期（1942年1月）に「在市上，要以一元八角の代價購取像本刊這樣厚厚的一本雜誌，敢說是除了我們「萬象」以外，更無第二種。讀者祇要比較一下，就可以明瞭我們並不是「志在牟利」了」とあるように、『萬象』の価格は他の物と比べて安いと書いてある。その後紙の値段がつり上がっていくことなどによって、価格は高騰していったようだが、その度に陳蝶衣から読者に諒解を求める文言が「編輯室談話」に書かれている。

これらから類推するに、『萬象』にとって読者とは、編集側から常に意識されていた存在だったと言えるのではないだろうか。例えば、第2年第4期（1942年10月）には、「根據數月來對於讀者來函的分析，使我們知道多數人閱讀本刊，並不是單純以消遣為目的，而完全是基於一種「求知慾」とあるように、編集部が読者からの手紙を分析していることが書かれている。これはつまり編集部は読者の要望に応えようとしていたという姿勢の現れではないだろうか。また第2年第2期（1942年8月）には、「在車中，路上，時常遇見先生或是小姐們，手裏捏了一冊「萬象」，有的甚至將包書紙將封面包了起來，這一中愛護之忱，不能不使我深深的感動。這裏，讓我向親愛的先生們小姐們致最誠摯的謝意；同時，我也願意告訴你們，「萬象」的編輯人是隨時隨地會站在妳們的身旁的」とあり、街中で人々が『萬象』を大事に抱えて持っていることを見ることに感激し、さらに編集者はいつもあなたたち、つまり読者のそばにいとまで言っている。他に例を挙げると、第2年第12期（1943年6月）には、「兩年來有一點值得一提的，是作者・讀者・編者融洽無間的工作」と書いており、『萬象』という雑誌が、作者と読者と編者がお互いに溶け合った仕事であると述懐している。つまり、『萬象』の編集は発信者である作者と受容者である読者を常に意識したものだだったのである。ある意味において、『萬象』とは、読者ありきの雑誌であったことが、もしくはそのようなポーズをとっていたことが、「編輯室談話」から見て取れるだろう。

3-2 吐露する読者：「萬象信箱」

こうした「編輯室談話」から見える「読者ありき」という姿勢が影響していると考えられるが、『萬象』はより積極的に読者の声を拾い上げるコーナーを設けた。第1年第7期（1942年1月）の「編輯室談話」に「為了取求與讀者的聲氣相應，本期起已添闢「萬象信箱」一欄，讀者如果有什麼意見，或者一般的問題，都可以投函提出詢問，編者當掬誠奉答。」と書かれているように、「萬象信箱」という読者投稿欄が設けられたのである。「萬象信箱」が掲載されたのは、第1年第7期（1942年1月）、第1年第8期（1942年2月）、第1年第10期（1942年4月）、第1年第11期（1942年5月）、第2年第2期（1942年8月）、第2年第3期（1942年9月）である。一

体どのような投稿が寄せられていたのか、以下の表に整理した。投稿者は全部で46名である。

月日の欄は、投稿が編集部に寄せられた日を指す。この欄に記載がない場合には月日の記載はない。「萬象信箱」の中には、編集者から読者からの質問に答えるものとして二つの形式があった。ひとつは、最初に読者からの投稿文を引用し、そして編集者がそれに答えるもの、もうひとつは「來函簡答」というものであるが、これは基本的に読者からの投稿文は引用せず、編集者が簡単な答えを書くというものであった。「來函簡答」に該当するものは、備考にその旨を書いておいた。また備考には、読者の投稿文や、編集者の答えから、その読者がどのような人物か（住んでいる場所、通っている学校、性別や年齢）が分かる場合には記載してある。また、投稿の内容を簡単に紹介しているが、その最初に、①から⑤の番号を振っている。①『萬象』に関わる問題 ②家庭問題 ③恋愛・婚姻問題 ④書籍紹介 ⑤その他として投稿の内容を分類した。

年-期	月日	名前	内容	備考
1-7 1942.1.1	11.30	馮夜邨	①(1)恋愛小説は少ない方がよい (2)海外外遊記をもっと掲載して欲しい (3)挿絵頁をもっといれて欲しい	
	11.27	程馥森	①雑誌がもう少し安価にならないか	
	11.25	薛維翰	①中国将棋の欄が開設できないか	
	11.27	許弼德	①中国将棋の欄が開設できないか	
		馬雲	①愛読してくれていることについての感謝	來函簡答
		涵谷	①学生文藝の投稿について	來函簡答
1-8 1942.2.1		沈安毅	④自分は知識欲が強いが、より意義のある本を読みたい。また創作を勉強したい、それらの書籍はあるか	
	12.25	李仁	①批評(1)『萬象』は無名作家の作品も掲載されていて好ましい (2)世の中には多くの問題があるというのに『萬象』にあった「問題討論」欄はすぐになくなってしまった (3)第7期に掲載されたフランス語の誤記について (4)シナリオの掲載が少ない (5)武俠小説の掲載がない 意見(1)中国将棋の欄の開設については反対 (2)シナリオのコンテストをやって欲しい (3)「問題討論」の欄の問題を読者の要望を募って欲しい (4)武俠小説の作品を掲載して欲しい	定單第十六號
	1.3	朱漸復	②姉と同居しているが、姉の夫が賭博にのめりこんでいる。法律的救済はあるか	十八歳、未婚、男性
		龔堯清	①学生文藝には中学生は投稿できるか否か	無錫南陽理五號
	1.3	趙龍伯	①『萬象』に掲載された作品の中に書かれたことと事実との齟齬を指摘	

		端木青	①「潮」と「汐」の解釈について	來函簡答
		小讀者	①小学生文藝選ができるか否か	來函簡答
1-9 1942.3.1	1.24	韋玉	②特に出来ることもなく、家庭の中で孤独を感じている。親との矛盾で仕事のチャンスもふいにしてしまった。自分は独立もままならず、仕事を見つけることができるだろうか	蘇州、二十歳、女性
		畢元椿	⑤貿易関係の契約等の郵送について	來函簡答
1-10 1942.4.1	2.11	張幼才	②戦争によって、学校を続けることが出来ず、仕事すらままならない。今は、小さな店で働いているが、もともと雑誌や新聞を読むのが好きで、投稿等をしたいが、学業をしっかりとおさめていないので、勇気が出ない。最近、友人の父が田舎で新聞を出すので誘ってくれた。だが、ものを書くのに自信がない。文章の創作の指南書を教えて欲しい	南京 江都初中の一学年まで
		陳仲文	①成都まで雑誌を送ってもらえるかどうか、費用はどのくらいか	成都寧夏街 樹德中學
		陳企光	④(1)民法や刑法に関する書籍の紹介 (2)教養を深めるための書籍の紹介	來函簡答 南京
		文偉	①孫了紅の創作状況について	來函簡答
		張志剛	④陳企光への回答を参考に	來函簡答
		馮學庠	①『萬象』に掲載されていた『涸脂淚』の単行本の出版について	來函簡答
		杜鵬	⑤長編小説単行本出版の費用について	
		一九二九號定戸	⑤(1)上海芸術劇団に声楽組があることについて ④(2)陳企光への回答を参考に	
		史文濤	①(1)『萬象』の価格について (2)『萬象』は無名作家の作品をよく掲載していることについて (2)電影小説(映画小説)の掲載について	
		葉尚倫	①蛍光灯の紹介について	
		凌秋聲	④商業簿記の書籍の紹介について	
1-11 1942.5.1	4.2	林威	③キリスト教を信仰している女性から好意を寄せられているがどうしたらよいか	
	3.10	李治平	①実用的な読み物として「工業製造」欄(文具や日用品等の製造過程を説明する)を作ったらどうか	無錫赤岸
		七三五號定戸	①長編連載をもっと増やして欲しい	
		馮志芹	①三月号の『萬象』の「学生文藝選」に掲載された戴維鏞の「雨」は、「高中作文精華」第4冊213頁の薛福華の「梅雨」の剽窃である	

		梁慄	①(1)定期購読者の特惠について (2)現在雑誌の価格が一定しないため、定期購読者を受け付けていない (3)以前「小説月報」に原稿を書いたが、現在は書いていない	來函簡答
		梅開源	①「仙逝」の字が誤用か否かについて	
1-12 1942.6.1		梁董	③同級生で仲のよいVが、自分に彼の従姉妹のSを紹介してくれた。私とSは趣味もあり、知り合って一年あまりにもなり、彼女のことを好きになったが、同時にVもSが好きだと知った。親友を取るべきか、彼女を取るべきか	
	4.17	晚德寶	③12歳の時に田舎を離れて学業のためにやってきたが、その際田舎で親が決めた婚約をした。親が決めた婚約を破棄したいが、田舎は遠いため、難しい。他の親族にやってもらうことはできないか、また法律の手続きはどのようなものが必要か	21歳 未婚 男性
		胡思	①『萬象』はどうしていつも頁にきっちり文字がおさまっているのか (他の雑誌はそうはいかない)、どのような編集技術を持っているのか	
		王伏雲	①12月号に掲載された小説に「媚薬」というものが出現したが、どういうものか	
		邵禹敬	④(1)手紙の書き方の書籍について (2)書法の指導書について	來函簡答
		郭茂生	④青年の教養を高める書籍の紹介	來函簡答
2-2 1942.8.1	7.20	C・M	③三人の友人の男性がいるが、どれも自分に求愛している。三人ともそれぞれ良いところがあり、なかなか選べない。どうしたらいいか	蘇州 女性
		馬劍岳	①『萬象』に掲載される文章は簡単である。もう少し難しいものは掲載できないか	
		方尚明	①『萬象』の誤字について	合肥
2-3 1942.9.1	8.1	楊知民	⑤(1)映画シナリオはどうやって書くのか ④(2)それに関連した書籍はあるか	一三七〇號定戸
		望雲	①「甲状腺」と「甲臓腺」について	
		江得勝	⑤実学として、商業簿記と英語のすすめ	來函簡答
		謝雲扶	⑤(1)中央書店の出版している本について、『萬象』読者には特惠がある (2)「三言体」とは何か	常熟
		一個忠實的讀者	①8月号の「学生文藝選」に掲載された張吉雲の「一個小車夫」は巴金の作品を剽窃したものと指摘	「学生文藝選」における剽窃問題

残念ながら、「萬象信箱」は第2年第3期で終わってしまうが、内容は非常に豊富で、これが継続されなかったのが悔やまれる。

ここからまず読者の分布として、出版地の上海だけでなく、他の地域にも読者がいたことが分かる。近場では、蘇州、常熟、南京、無錫から投稿が寄せられており、江南地域の読者が多かったことが推測されるだろう。だが、成都の読者からも投稿が寄せられている。上海から江南地域を中心にして、他の地域、ある程度広範囲にも読者がいたことを示唆しているだろう。

投稿の内容を見てみると、①に分類した雑誌自体に関わる問題は、46名のうち26名が投稿しており一番多い。誤字や誤表記、もしくは雑誌で用いられた語句の使い方などの問題まで指摘されているのを見ると、かなり読み込む読者がいたことが分かる。雑誌に寄せられる意見も様々で、読者が雑誌に色々な考えを持っていたことが見て取れよう。

非常に興味深いのは、この読者投稿欄では、雑誌には関係がないことも寄せられていた。例えば、②家庭問題と③恋愛・婚姻問題に分類した投稿である。家庭の問題は3名、第1年第8期(1942年2月)の朱斬復、第1年第9期(1942年3月)の韋玉、第1年第10期の張幼才の投稿であり、恋愛・婚姻問題にも3名、第1年第12期(1942年6月)の梁董と晚德寶、第2年第2期(1942年8月)のC・Mの投稿である。これらはまったく雑誌とは関係ないが、読者たちの苦しい境遇が寄せられ、それに対して編集者である陳蝶衣は一人一人に真摯に答えている。

さらに④に分類した書籍紹介も少なくない。全部で8名から寄せられている。これは文面から考えるに、読者達が自分の知識を増やしたいという思いから編集者に関連書籍の紹介を頼んでいるようである。つまり、雑誌を介して他の知識を得ようとしているのである。

これらの読者投稿欄から見えるのはどのような読者の姿だろうか。家庭の問題や恋愛の問題の寄せられた内容から分かるように、読者は就職、恋愛、結婚に悩む年頃の若者であることが類推される。さらに知識を求める、その姿勢からも若者の姿が示唆されている。無論、他の年齢層の読者もいただろうが、読者投稿欄からは、当時の厳しい社会において社会へと漕ぎ出そうとする、もしくは一歩踏み出したもの、学業をやめることを余儀なくされて出ざるを得なくなった若者の姿が見えてくるだろう。

3-3 創作と学生文藝選

『萬象』における読者と関連する更なる試みとして「学生文藝選」を見ておこう。「学生文藝選」に関しては、第1年第1期(1941年7月)に募集広告が掲載されている。そこには以下のように書かれている。「本雑誌為鼓勵學生對於文藝之創作與興趣起見、特設立「學生文藝獎金」學生の文藝創作を推進するために作られたものであることが分かる。その参加条件は、「以國內

各大學及高中之學校為限」とあり、国内の大学生と高校生を対象にしたものであった。内容は、純文藝を主体とするが、創作小説、翻訳小説、報告小説などであった。賞金は、甲等であれば、一千字につき10元、乙等であれば、掛け時計（20元相当）、丙等であれば中央書店の金券が10元貰えた。

「学生文藝選」は、第1年第3期（1941年9月）から掲載が始まり、第2年第2期（1942年8月）まで学生文藝選の作品は掲載された。基本的に、每期2編から3編が掲載された。

以下は、『萬象』に掲載された作品の一覧である。

年-期	発行年月日	タイトル	学校・学年	作者	性別	年齢	備考
1-3	1941.9.1	熱帶的夢	暨南大學商院	楊璇璋	男	21	
		二十年前的約會 美國幽默小說家 歐亨利 原著	光華附中高二級	徐疾	男	16	
1-4	1941.10.1	小竹	東吳大學	楊奇姿	女	21	
		一個平常人的沒落	師承中學高一級	江月仙	女	18	
1-5	1941.11.1	(虫兌)變	蘇州工專 機械化三年級	屠國	男	18	
		割愛	華東女中高二級	胡亞貞	女	18	
1-6	1941.12.1	未婚妻的留難	光華大學一年級	王繼華	男	19	
		離人	開明中學 高中乙級	梅薇	女	19	
		阿R正傳的流產	東亞體專三年級	姜耶德	女	22	
1-7	1942.1.1	落葉	京江中學 高二年級	李百功	男	19	
		湖	廣東省立第一中學 高中一年級	莫炳權	男	17	※1
		回憶的網	聖瑪利亞高中 二級	李凝	女	18	
1-8	1942.2.1	祝福	東吳大學三年級	程育真	女	21	
		測驗	大同大學一年級	朱曾汶	男	18	
		易牙	新建中學高三級	王植波	男	17	
1-9	1942.3.1	雨	京江中學 高二級	戴維鑄	男	19	※2
		歧途	聖約翰大學 文科一年級	邢禾麗	女	20	
1-10	1942.4.1	青春之液 美國 Nathaniel Hawthorne 原著	復旦大學 醫科二級	余愛淥	男	20	
		善意的謠言	東吳附中高二級	程慰直	男	17	

		漫歩	滬江英專 高B級	嚴(羽中)	女	18	
1-11	1942.5.1	春殘夢斷	滬江附中高三	黃文錦	男	18	
		末路	京江中學 高二級	張真淑	女	19	
1-12	1942.6.1	愛的真諦	培成女校 高二級	張蘭	女	17	
		淡藍色的信封	南洋大學工學院 一年級	黃宗熙	男	18	
2-1	1942.7.1	佛與上帝	揚州中學高三級	吳懷瑾	男	20	
		陰謀	師承中學高一級	葛子香	男	18	
2-2	1942.8.1	寶寶	滬新中學高一級	章祖燮	男	18	
		一個小車夫	興中中學高二級	張吉宣	男	19	※ 3

※ 1 広州からの投稿

※ 2 第1年第11期(1942年5月)の「萬象信箱」の馮志芹により剽窃と指摘

※ 3 第2年第3期(1942年9月)の「萬象信箱」の一個忠實的讀者により剽窃と指摘

投稿者は学校名から類推するに上海を中心として、江南地域がほとんどを占めている。ただし、暨南大学や廣東省立第一中学という場所からも広州から送られた原稿があることが分かり、様々な場所から投稿されたのではないかということが推測される。

第1年第8号(1942年2月)には、程育真の名前が見える。彼女は、かの探偵小説家として有名な程小青の娘だが、1940年代には「東呉系」と呼ばれる女性作家の一人として活躍する。東呉系とは、彼女の学校名をみて分かる通り、東呉大学(現在の蘇州大学)出身による。

「学生文藝選」は、残念なことに第2年第2期(1942年8月)をもって終了してしまう。その原因は表の※2と※3にも書いたが剽窃問題であった。第2年第3期(1942年9月)の「編輯室談話」に次のように書かれている。

「学生文藝選」の園地的開闢，原擬給予愛好文藝的學生們一個習作的習慣；不料我們的熱望卻招致了意外的惡果——「抄襲！」這不幸的情形已先後發生兩次；這種不道德的行為，不但褻瀆了本刊的篇幅，同時在抄襲者也無異壅塞了自己的進取心；以一個求學時代的青年而如此不自愛，實在太可痛心。本期起，「学生文藝選」擬暫時取消。以後除非有學校及師長蓋章「保送」，證明其確為創作；否則這一欄不預備恢復了。

文芸作品を愛好する学生のために開設した欄が、剽窃問題のために汚されてしまったことを述べ、またそのような行為をした人物を痛烈に批判し、学校や教師が創作という保証をしない

限り、今後この欄が回復することはないと述べている。

ただ、期間としては短いながらも、この欄が開設され、そして各地から剽窃を含むにせよ、多くの投稿が寄せられたのは想像に難くない。その中から程育真のような、その後作家として活躍する人物が出ていったということは、この欄が新たな作家や文芸作品を生んでいくひとつの基地になったことが示唆されている。

4 小結

以上、『萬象』に見える読者の姿について、「編輯室談話」「萬象信箱」「学生文藝選」を整理した。「編輯室談話」では、一貫して読者という存在を意識し、彼らに語りかけていくような姿勢が保たれ、「萬象信箱」では、読者達の投稿の中で、雑誌に関わるものの他、若い読者達の知識欲や、家庭や恋愛の問題に悩む姿が見えた。「学生文藝選」では、まさに「萬象信箱」に見えた投稿者の年齢である学生達が意欲的に創作を行っていた。

こうしたことから見えてくるのは、『萬象』は徹底的に読者を意識した雑誌であったことではないだろうか。そして、同時に、混迷する社会の中で文化や知識の飢えを満たそうと雑誌を読み、そしてその編集者にすがり他の知識を得る手掛かりを聞き、そして日々苦悩の中で生きている読者の姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。

本論は、資料を整理したに過ぎず、より深い討論には入れなかった。これは次回の課題にしたい。この資料の整理から発展する問題としては、読者達が「萬象信箱」で吐露した家庭や、恋愛・婚姻問題は、読者達が投稿した「学生文藝選」と如何なる関係にあったのか、もしくは『萬象』に掲載された他の小説と関係があったのか、という文芸産出に関わるものが考えられよう。さらにこの問題はより大きな問題と関係している。『萬象』と同時期にも他の文芸雑誌が発行されていた。そうした雑誌の中では、このような、読者を意識したものが行われていたのだろうか。もし行われていたとして、そこにどのような読者の姿、そして小説創作が行われていたのか。今後少しずつでも当時の読者の姿を明らかにし、彼らと小説創作の関係に関して考えていきたい。